3

ICPC 協議会

2009.4
↓
2010.3

2009.4
↓
2010.3

平成２１年４月より、ベニーズに専任事務局員を配し、ＩＣＰＣ協議会が始まる。毎月行った運営委員会では、事業の立案・報告の場として開催。市民主導の組織として活動が始まる。

ＩCPCのコンセプトである《みなと再生と市民をつなぐプラットフォーム》としてどのような活動を行えばいいのか、暗中模索の船出の１年であった。

みなとマルシェ（みなとでの賑わい創出事業）

みなと再生完成後の仮想空間として、今治の味を集めた市場『みなとマルシェ』を展開。みなと再生事業予定地を探検しながら巡る『みなと探検パフォーマンス』を企画運営。

探検シートのミッション一つ一つに港に関わる歴史・食・文化を盛り込み、１０のミッションを行うと港のことが解る仕組みを展開

乾杯クーポン（新しいコミュニケーションツールの作成）

①みなと周辺の飲食店を活性化し、人の回遊性を高める。
②今治を訪れるお客さんはもとより、市民に対してもみなと周辺の美味飲食を PR する。
③日本語がわからない外国人が訪れても、提示するだけで安心して飲食できるコミュニケーションツールを創造する。
④海事都市今治の PR をお手伝いする。
⑤将来の ICPC のリーディングプロジェクトの一つとして、持続性の高いみなと周辺回遊システムを作るための社会実験として実施する。

協力店を３種類に分類

- ■ クーポン１枚で飲食できるお店（６００円相当）
- ■ クーポン２枚で飲食できるお店（１２００円相当）
- ■ クーポン３枚で飲食できるお店（１８００円相当）

今治シビックプライドスクール（共通認識を広げる場づくり）

今治シビックプライドスクールは市民の方々に「いまばり」とは何者でどこから来てどこへ行くのかを考え、ICPC の活動の理解と協力を得ることを目的として開催。

《第一期：今治の「みなと」を読み解く》と題し、ICPC の活動の拠点となる「みなと」地区を取り上げ港とその周辺を様々な視点から読み解き、中心市街地再生の足掛りとしての「みなと」の共通認識を広げます

第１回　１１月１１日　「歴史の中の今治とみなと」村上正郎（今治史談会会長）
第２回　１１月２４日　「海運業と今治とみなと」阿部克也（日鮮海運株式会社代表取締役社長）
第３回　１２月　８日　「今治商人とみなと」村上哲朗（今治商店街協同組合理事）
第４回　　１月１９日　「しまなみ海道、今治の自然と人文」小林真吾（愛媛県総合科学博物館）
第５回　　２月　９日　「瀬戸内海国立公園と今治」桧垣淳夫、永田清美
（環境省中国四国地方環境事務所高松事務所松山自然保護官事務所）
第６回　　２月２６日　「今治のみなとと公共空間」太田浩史（東京大学生産技術研究所　講師）
第７回　　３月　９日　「みなと再生とまちづくり」　森脇　宏（㈱地域計画建築研究所　所長）
第８回　　３月１６日　「新たな協同の絆で地域の活性化を」　村田　武
（愛媛大学社会連携推進機構教授）

第４回　ＩＣＰＣサロン(商店街未体験トラベルの考察)

市民が外部コーディネーターと一緒にイベントを創り上げ、そのノウハウを吸収し、各々の活動に生かしていく仕組みはどういった利点があるのかを考察します講師として、山口情報芸術センターの会田大也（あいだだいや）氏をお招きしました。

山口情報芸術センターでは、2003 年から「山口アートマネジメント隊」と題して、市民が長期的にアーティストとともに活動できる機会を提供しています。この活動の中で、参加者は短期的なワークショップでは経験できない創造的な試行錯誤や問題解決といった活動を通し、アーティストのユニークな視点や考え方にじっくり関るとともに、アーティストの目線を通して、自らの住む山口という町について、改めて捉え直す機会に触れる機会を創っています。

プライドという言葉を考えた時に、自分がやり遂げたという自信と周囲からの評価も重要です。周囲からも評価がまたプライドの醸成につながります。様々な立場の人達と信頼を結ぶ事が必要ですが、数回の打合せでそれはできません。長い時間をかけて、回数を重ねて行くうちにだんだん打ち解けていくものだと思います。そして、本気で物を作っていくにはリスクも付き物です。

検討を重ねて行くうちに考え方の違いから去っていく人もいますし、それらを見たスタッフも困難はつきものだという事がわかったと言われました。『誰かが誰かのためにやってあげる』という意識があれば失敗します。やってあげるという意識が生まれてこない関係作りをどうやったら作れるかということがまちづくりのイベントでは必要と言えると思います。